

## 第1回 JIA 近畿支部「建築家新人賞」 審査講評

第1回 JIA 近畿支部建築家新人賞は、45才以下の会員を対象とし、近畿支部地域に完成された建物を審査する初めてのコンクールである。新人賞を選ぶにあたって3人の審査員と出江 寛支部長、木原千利建築賞分科会長の5氏で、審査の基準について話し合った。そして次の7つの柱を基本事項として審査することが確認された。

・社会性 ・技術性 ・経済性 ・環境性 ・将来性 ・デザイン性 ・チャレンジ性

以上が建築作品の中にどのように生かされているかを念頭において進められた。16氏の会員からの応募作品は、いずれも優れた資質を備えた作品ばかりであり、第1次審査に長時間の審議が費やされた。提出されたスライドと図面を見比べながら、3人の審査員が持ち票を投票し、全作品について審議を重ねた。

応募作品すべてを現地で確認する方がよいのではないかという意見も出されたが、写真と図面をもって1作品ごとに議論を積み重ねていき、最終的に10氏の作品が第2次現地審査の対象作品として選出された。

以上の結果から選ばれた作品は独立住宅と集合住宅に片寄ってしまったが、作品の規模を問わなかったにも関わらず、住宅が結果として選出された。

10作品について3日間にわたり現地審査が行われた。個人住宅の審査はクライアントに多大なご迷惑をかけるにも関わらず、どの住宅も快く迎えて下さり、快適な住まい方をしていると感じられた。特に建築家とクライアントとのつながりがうまくいっている点を読み取れた。

全作品を見終えたあと最終審査に望んだ。10作品について各審査員の持ち点を投票し、作品を順次絞り込んでいった。その結果、3氏の作品が最終審査に残った。

森下 修氏の作品について

四季の丘団地は50戸の町営住宅の建築である。農地を整備した敷地の中庭に小高い広場が作られ、集会所を囲むようにして、住戸が少しずつずれながら11棟の低層住宅が円弧を描いて配置されている。すべての入り口がこの広場に向かってアプローチするようになっている。こうすることによって住人同士のつながりが生み出し易いように感じられた。

低層に押さえられた住戸は各部に工夫があり、住む人に合わせた12戸のプランはそれぞれに魅力のある提案が感じられた。さらに外部と内部の間にある建具の使用の仕方には新しさが感じられ、内と外が見えかくれしながらも一体となり、広場へとつながっているのが新鮮であった。

ランドスケープをきっちりと抑え、敷地の高低差を作り込みながら、ヒューマンスケールで作られた建築と外構はそこに住む人に魅力のある住空間を提案している。意欲のある建築として仕上がっている点が高く評価された。

矢田朝士氏の作品について

Eshouse-01は農村集落のはずれに位置し、周囲の田んぼの中に1戸だけ忽然と建っているような印象を受けた住宅である。平家建てに抑えられたコンクリートのカラの箱の中にもうひとつ家を入れ込んだ住宅である。現地を訪れるまでの印象は、建築家のひとりよがりであり、少しやりすぎではないかと思っていた。しかし、この考えは見事にくつがえされた。写真で見るのと建物の空間に触れるのとでは大きな違いを感じた。

農村住宅が持ち得た土間の扱い方が、分割された諸室とうまく連続している。そして土間があることによって日常生活にめりはりが生まれ、時間の流れの中で自分の居場所を見つけだすことができる空間の配置がされていた。

外と内が直接つながるのではなく、大きな空間で囲われた中間領域としての縁側が光を抑え込み、領域を意識させながら連続する。それらは外殻と内殻の間に生まれた隙間の空間の按配がほどよい空間を生み出している。そこには日本建築が持つ美しい空間が感じられる。新しい住まい方の提案がされ、今後の住宅のあり方を十分に示唆している点を高く評価した。

長坂 大氏の作品について

桂の家は木造2階建ての小規模な作品であった。周辺の環境をうまく読み取り、角度を持った平面は、外の庭と内の室とのつながりがずれることで広がりのある空間を生み出し、内部空間の質を高めている。そして斜めから入る光影が壁の質感を変え、1室空間に広がりを見せていた。

構造材を表した表現と構造用合板で納めた空間は小奇麗に仕上げられていた。クライアントの家に対する思い入れもよく、受賞に相当する高いレベルが作品としては認められるが、もう一步踏み込んだ提案を期待する声が大きく、氏の建築家としての実績からすると、新人賞として選出するにはどうしても躊躇せざるを得なかった。

以上3作品が最終選考で議論されたが、森下氏と矢田氏の2作品が新人賞として選出された。

初めてのコンクールではあったが、いずれもレベルの高い作品であった。

新人賞推薦の森下氏、矢田氏をはじめ応募された諸氏がさらに精進を重ねられ、関西の建築文化に貢献されることを期待する。

審査委員長 竹原義二

矢田朝士氏の作品「Eshouse-01」について

「外家」と呼ばれる外殻のなかに「内家」と呼ばれる内殻が二つ置かれている。室としての「内家」と殻としての「外家」の間に生じる隙間を介して、内外が閉じつつ開いて連続する。閉じつつ開く度合いは、時間や季節、気分によって変えることが出来る。水周りは外家に属するものとしてつくられているが、中庭状の隙間に面している。さらに、隙間を利用するアプローチの空間が「外庭-01」、「内家」と「内家」のあいだの土間空間が「外庭-02」。「外家」と称する外殻が適度に穿たれているせいで、「外庭-02」は、内部と外部の微妙な雰囲気をも併せ持ち、思わず、棲むという言葉が浮かんだほど。全体としても豊かな場所性を内在する住宅となっている。日本の風土や日本の伝統的空間との応答の結果として、「現代のすまい」に中庭や縁側をも含む「隙間」という中間領域で応えたこの住宅には、図面で感じる意図性を覆すほどの、「清新さ」が感じられた。この住宅が、今後どのように使いこなされていき、周囲の環境のなかにどう溶け込み、風景となって同化していくか、見守っていききたい作品である。

森下 修氏の作品「四季の丘団地」について

集合化された住宅(住棟)の構成がおもしろい。妻壁を含む隣戸間がRC造、基礎を含む下部構造(場所によっては道路とのレベル差を利用した駐車場)もRC造、RC壁の間が木造の架構を渡した木造である。上下階の騒音などの問題だけに拘るのではなく、長期的に環境をつくっていかうとするその姿勢からの解答である。この場所の風景になじみつつ、新しい環境をつくっていかうとする意図も、平面的にも立体的にもやわらかくズレた配置で囲み空間を実現しているところに明快に現れている。住棟間に隙間をとって、その妻側に2階住戸へのアプローチ空間を取り、小さなスケール、出会いの風景をさりげなく演出し、住戸前の内庭には小さな単位の駐輪スペースを大胆に設けている。外壁には外断熱を採用して、RC打ち放しと木造による内部空間を実現し、外断熱の外壁に地元産の瓦材を用いるなど、従来の公営住宅団地には見られない新しい提案を具現化しており、共感するところの多い作品である。設計競技を経て実現した町営(現在は南あわじ市営)の公営住宅であるが、若く新しい力に期待した(旧)町に敬意を表すると共に、その期待に意欲ある提案をもって応えた設計者を高く評価したい。

審査員 江川直樹

森下 修氏の作品「四季の丘団地」について

淡路島に建つ公営住宅であり、洪水対策としての土盛りを逆手にとり「四季の丘」というようにコミュニティーの中心となる大きな広場を取り囲む様に住宅が配置されている。その中央に集会所が置かれ、人々はこの広場からそれぞれの住戸へアプローチする。イベントにも使えるこの広場は精神的な中心として構想されている。

今回の新人賞の評価のポイントは、構想、デザインからディテールまでの力と社会性、チャレンジ性である。RC造の駐車場の上に2層の木造住宅を載せた構造、素材においても新しい材料とあわせて淡路瓦を外壁や屋根に使用し地域性にもよく配慮されており、構造からディテールまでよく練られている。

公共建築の設計には、様々な制約や困難さがあることを考えると大変努力されたことと思われ新人賞にふさわしい秀作である。

矢田朝士氏の作品「Eshouse-01」について

この作品は書類選考では、その空間が理解できなかった。しかし写真や図面からの想像を超える空間が実際にはあった。RC造の外皮の内側に木造の室が入れ子に入っている。吹きさらしの土間空間はどのように使うのかと理解に苦しんだが、隣接する居間、食堂、台所は環境的に快適な空間が用意されており、この対比が生活に緊張感を生み出している。閉鎖と開放のメリハリを効かしているが、光の取り込み方にもう一工夫欲しかった。若々しいチャレンジ精神にあふれているがもちろんディテールもきちっと納められており新人賞にふさわしい秀作である。

審査員 吉羽逸郎